

令和5年度 大阪府立槻の木高等学校 第3回学校運営協議会

令和6年2月9日 14:45～  
大阪府立槻の木高等学校 会議室

委員

会長 渡辺 将史（本校 PTA 会長）  
副会長 安田 信彦（高槻市立第一中学校校長）  
委員 浅田 良一 田中 隆夫 宮坂 政宏 山本 冬彦

事務局

青竹 二郎（学校長）  
水井 理弘（事務長）  
小川 大樹（教頭） 小西 久美子（首席） 江菅 純一（首席）  
川代 恵子（学校運営室長） 岡田 英次（学習指導室長） 井上 公彦（生徒指導室長）  
笠井 啓佑（新採教員）

- 開会 学校長 青竹 二郎より挨拶  
会長 渡辺 将史より挨拶
- 令和5年度 学校経営計画および学校評価 達成状況について
- 令和6年度 学校経営計画および学校評価（案）について
  - ・めざす学校像については令和6年度も変更はなし
  - ・令和6年度の中期目標について
    - 22期生が令和8年度の卒業までに達成した目標値である。
    - 1人1台端末の活用等による協働学習、反転学習を取り入れた授業の推進、家庭学習の定着を追記した。さらに家庭学習時間の改善につながると考えられる
    - 部活動参加者の1年生90%の維持を追記した。
    - 防災・減災教育の充実を追記した。特に減災教育に力を入れていきたい
    - 校長ブログ・部活動ブログの発信数を追記
  - ・本年度の取組内容および自己評価について  
(中期的目標 社会に貢献できる人材を育成するより)
    - 2年生10月の勉強時間については減少傾向にある。コロナが5類に移行し部活動が活発になったことも考えられるが、スマホなどの機器を見ている時間が増加しているのではないかと考えられる。反転学習や協働学習を導入することで改善していきたい
    - 「NEXT STAGE」においては近畿大学や東北大学教授の特別講演を行うなど、生徒の満足度が非常に良かった
    - 本校の課題である、遅刻者数が増加している。1年生の遅刻が増加しているため、改善してい

きたい。

自転車事故が増加しているので、安全の講習など周知していかないといけない。

修学旅行のアンケートについては肯定的な回答が大変良かった。

(中期的目標 社会の動きに即応できる機能的な組織運営に努めるより)

令和 5 年度の実績で「生徒指導は納得できる」が△になっている。間違った生徒指導はしていないので、納得感のある生徒指導を心がけていく

令和 5 年度の項目に新型コロナウイルス感染症の表記を削除し、令和 6 年度には南海トラフ地震を想定した、防災・減災教育の実施を記入した。

(中期的目標 生徒、保護者、地域からの期待に応え、信頼される教育活動より)

令和 6 年度は学校教育自己診断「学校へ行くのが楽しい」の結果の数値目標を掲載。令和 5 年度の実績で部活動ブログの更新が増えたので◎にしている。それを踏まえ、令和 6 年度は校長ブログ、部活動ブログなどの発信数を増やすことを目標にした。

(中期的目標 校務運営の効率化と働く方改革の推進より)

令和 5 年度の実績では時間外勤務の実績が減らない状態、令和 6 年度は「部活動方針の順守(平日の週 1 回は活動しない・土日はどちらか活動しない)」によって時間外勤務の時間を減らすことを意識して実行する

#### ○ 授業アンケート (後期) 集計結果報告

昨年度の結果、前期の結果を比較したが、変化がない結果となった

2 月末にプロジェクターと黒板の更新が行われるので、一つのツールとして、利用していきたい。

#### ○ 令和 5 年度学校教育自己診断結果の報告

(教頭より)

昨年度は生徒、保護者、教員とフォームを用いた回答を求めたが、保護者の回答が紙面で行った時よりも大幅減少したので、紙面での回答に戻した。回答数が増加した。

「特色のある学校である」という回答は生徒、保護者も高い数値を維持している

「学校へ行くのが楽しい」は 8 割以上の生徒が回答

「1 人 1 台端末を効果的に活用している」は大幅な上昇をしている

中学校訪問などで「本校の生活指導は厳しい」という質問等を聞くが、「先生はまちがった行動を正す指導をしてくれる」の 9 割以上の回答があるので、しっかりとした指導を継続していく方向で考えている

行事・部活動については新型コロナウイルス感染症が 5 類に移行したことにともない、規制がなくなったので、満足度が向上している。

(校長より)

1 年生の回答で「特色のある学校である」が 96%という数値である。2 年生から半期認定を行っているが、1 年生から感じているという結果はありがたい。

「先生には授業等での質問がしやすく、ていねいに教えてくれる」の回答が向上しているが、

もう少し向上するように努力していきたい

緊急対応については、1年生の保護者から質問が多いのですが、中学校との対応違い（高槻の中学校は大雨警報で休校処置）で戸惑うことが多い。また、能登半島の地震があり、今後、地震における緊急対応の検討・見直しを考えていく

教職員の結果で、中学生の減少等で本校の入試倍率が減少していることを示したが、危機感を発しただけで、「ではどうしていけばいいのか」を示していなかったため「リーダーが発揮されている」の数値が低かった。改善して生きたい。

研修については、継続していきたい。研修の計画についてが少し改善した。

情報発信については、数値が向上しているが、校長ブログをはじめ、さらなる向上をめざしていきたい。

## 5 協議

質問 「私立高校の無償化」（来年度私立は 1500 人増）の影響と槻の木高校の校風は私立と似ているが、入試倍率の影響と対応について

回答 無償化の影響はある。近隣の高校の進路希望調査の結果から 1 倍を割れている高校が増加した。本校も割れている状況である。非常に厳しい状況であるので、本校の魅力を情報発信し続けるしかない。

質問 授業の見学をしていたが、ペアワークや ICT を使用して、非常にわかりやすい授業だった。しかし、少し簡単すぎるのではないかと感じた。大学入試（特に共通テスト）では思考力を解く問題が増加しているので、もう少し考えられる授業を増やしたらどうか。

回答 「わかりやすく伝える授業」と「考えさせる授業」のバランスは非常に難しい問題。共通テストの問題を見ると膨大な資料から読み解き、解答を導く。教科横断的な展開をしていかなければいけない。しかし、私立大学の一般入試では、知識を問う問題が多いので、両方をバランスよく教えるのは検討課題である。

意見 高槻市の出生数を見ると 10 年先の子供の数が 1000 人減少している、公立小中学校での影響（学校や教員数の減少等）持続可能な学校経営を考えないといけない。

10 年ごとに学習指導要領が変更されているが、今回は学力観のアップデートや学校全体、教員の意識も変化していかないといけない。アンケートの結果を見ると授業力の数値が上がっていることはいいこと。しかし、授業の再考を考える必要がある。教える内容はそれ程増えていないが、「入試対策として、これもあれもしょう。」ということが増えているのではないか。3 観点についてバランスよく教えることができていない。どうしても「知識」についてやりすぎている。「思考」のバランスを上げることで「知識」を得ることができるので、そのバランスを再考してほしい。

公立高校の強みは「先生」。採用試験に合格しているので、教科の専門性が強みである。研修が公立は充実している。異動があることは様々な学校を見られるので、最大の研修の機会である。

回答 本校は単位制なので、教員の数が多いので、非常に強みである。しかし、学校説明会ではこの点をアピールしているが、中学生には響いていない。この点の魅力を発信していかないと

けない

教員は「教えたい」ので、生徒の主体的な（ファシリテーター的な要因）ことを増やしていかないといけないが、教科書を終わらせることも必要なので、難しい状況。

意見 大学入試について、特に私立大学は学習指導要領に基づいて、入試問題を作成していない。思考力をつけるためには、生徒たちに「疑問」を持ってもらうことが大切である。

質問 授業内容について、保護者と生徒のとらえ方が違うのではないか。保護者は知識を教えてほしい要望が高いと思う。その点、学校と保護者とのコミュニケーションが取れているのか。学校の学習指導方針がうまく伝わっていないのではないか。

校内での教員のコミュニケーションが取れていないのではないか。教員の世代間のギャップなどの問題をどう解決しているのか。

生徒指導について納得できない回答が多いのはなぜなのか。生徒は教員を信頼しているので、なぜこのような数値が高いのか。

回答 教員のコミュニケーションについては、教員のストレスチェックの結果から、同僚性や上司への評価が下がっている。仕事量は変わっていないが、早く帰るよう促しているため、空いた時間の教員間のコミュニケーションの時間が減少している。

質問 学校の魅力はなんですか

回答 学校の魅力は生徒です。生徒は登校や廊下でのあいさつをあたり前のようにしている。この点、教員と生徒の距離が近いので、質問もしやすい。この点を中学生に伝えられないか模索している。

質問 生徒の睡眠時間についてアンケートを取ってほしい

回答 1・2年は毎年4月に取っています。

## ○まとめ

理想の高校教育は大学のことを考えるより社会のことを考えることが大切である。高校は大学入試について考えないといけない。悩ましい状況にある。しかし、今教員にとって、少子化社会に向かっている生徒にどのような教育をしないといけないかを再考えないといけない。

国の学校教育審議会の流れで、普通科の改革が大事な局面を迎えている。同時に民間企業も激動改革の時期である。この変化を教育現場は生徒にどう教えていくかが弱い。

生きる力、探究力、このあたりの教育をもう少し力を入れてほしい。これが社会につながると考えている。これが今後の新しい普通科の課題になっている。

保護者の学校を選ぶ基準は、学費が安いのか、家から近いのか、偏差値、進学がどうか、クラブ、学校生活はどうか。椋の木高校は私立高校に比べてどうなのか。

椋の木高校の魅力は生徒とかかわる時間が長い。教育の中身が強み。小中高連携をアピールしてほしい。土曜講習など学校の講習を充実させているので、通塾率が低い。この点をアピールしていけばいいのではないか。

教育については中学校や高校は生徒が自立していくので保護者が関与しない方がいい（その方が育

つ)。しかし、保護者は心配なので、学校に相談に来ることはよくある。しかし、最終的には生徒と学校を信じてほしい。

先日生徒会が「中庭の照明の設置について」PTA に協力を依頼してきた。このような事例の魅力を発信していきたい。生徒の部活動等の頑張りを PTA としてどのように発信できるのかを考えていきたい。